

AG5 プロジェクト 2021 年度 最終報告書

2022 年 1 月 31 日 提出

文責：AG5 プロジェクトコーディネーター

平岩 佐江子

目次

はじめに 2021 年度事業概要

1. 日本人学校教員によるオンライン出前授業の実施
 - (ア) 日程、授業学年
 - (イ) 出前授業の様子
 - (ウ) 出前授業を振り返って（出前授業に関するアンケート、教材評価アンケート）
 - (エ) 今後の課題等
2. 日本人学校における移住学習
 - (ア) 学年ごとの取り組み
 - (イ) インタビューの様子
 - (ウ) 移住学習を振り返って（学習前、学習後の児童生徒のアンケート、移住学習全体の感想）
 - (エ) 今後の課題等
3. 本年度の成果

総括～5 年間の活動成果および事業終了後の持続可能な活動～

はじめに 2021 年度事業概要

2017 年度より開始したアスンシオン日本人学校（以下、本校）における「南米日系人及び現地コミュニティにおける日本型教育・日本語教育の発信・普及のためのプログラム開発」は、本年度で 5 年目の最終年度を迎えた。

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に伴い、2020 年 3 月よりパラグアイでは全面的なロックダウンの実施が行われ、義務教育を含む教育活動のオンライン化が急速に進んだ。2021 年はパラグアイの新年度にあたる 2 月より、一部の公立・私立学校では対面とオンラインを組み合わせたハイブリッド授業が始まるなど、コロナ禍での新しい試みが開始されており、本校でも 6 月より学年別分散による午前中のみ週 1 回の対面授業を実施し、10 月より全児童参加の午前対面授業、午後にオンライン授業というハイブリッド形式を実施、さらに 11 月より午前午後対面授業にて試行した。

本事業の主要取り組み先である、アスンシオン日本語学校（以下、日語校）でも、オンライン授業のみで新学期を迎えたが、10 月より対面またはオンラインのどちらかを選択し、ハイブリッド授業を開始した。しかしオンラインのみを選ぶ家庭も多くあり、対面授業のために登校する児童生徒の数は限られている。

このような状況を鑑み、本年度も昨年度と同様、「日本人学校および日本語学校の合同教員研修会（モデル授業）」および「書写指導」といった対面での取り組みは中止とし、毎年日本人学校教員による出前授業のみをオンラインにて行うこととした。

また、本年度は日本人学校の児童生徒に対する移住学習を行った。学習の中では日系人の方々へのインタビューを含めた。本事業の取り組み対象は、これまではどちらかという日本語学校に在籍する日系人の児童生徒が主だったため、日本人学校の児童生徒が本事業に関わる大きな機会となった。

1. 日本人学校教員によるオンライン出前授業の実施

日語校への出前授業は、2017 年より毎年実施してきた、本事業の最も重要な取り組みの一つである。

本年度は昨年度と同様、オンラインにて全6回の授業を10月に実施した。地方都市や日系移住地にある各日本語学校に対する参観希望者の呼びかけは日語校を通して行った。第3回についてはエンカルナシオン日本語学校の小4、5、6年生の合同クラスに対して出前授業を行った。

また、各日本語学校に対して、同出前授業についての感想および前年度までに作成した教材についてのアンケートを配布した。

(ア) 日程、授業学年

授業日程、授業学年は以下の通りである。アプリケーションはZOOMを使用した。指導案は添付資料①フォルダを参照のこと。

	第1回	第2回	第3回
日程	10月9日(土) 10:30~11:20	10月16日(土) 9:15~10:00	10月18日(月) 13:00~13:45
授業者	伊原教諭	平山教諭	金元教諭
学年	中2(アスンシオン)	小2(アスンシオン)	小4・5・6(エンカルナシオン)
教科	理科	国語	音楽

	第4回	第5回	第6回
日程	10月20日(水) 15:30~16:15	10月23日(土) 11:00~11:50	10月30日(土) 10:30~11:15
授業者	大家教諭	道藤校長	宮本教諭
学年	小5・6(平日) (アスンシオン)	中1(アスンシオン)	小4(アスンシオン)
教科	国語	社会	国語

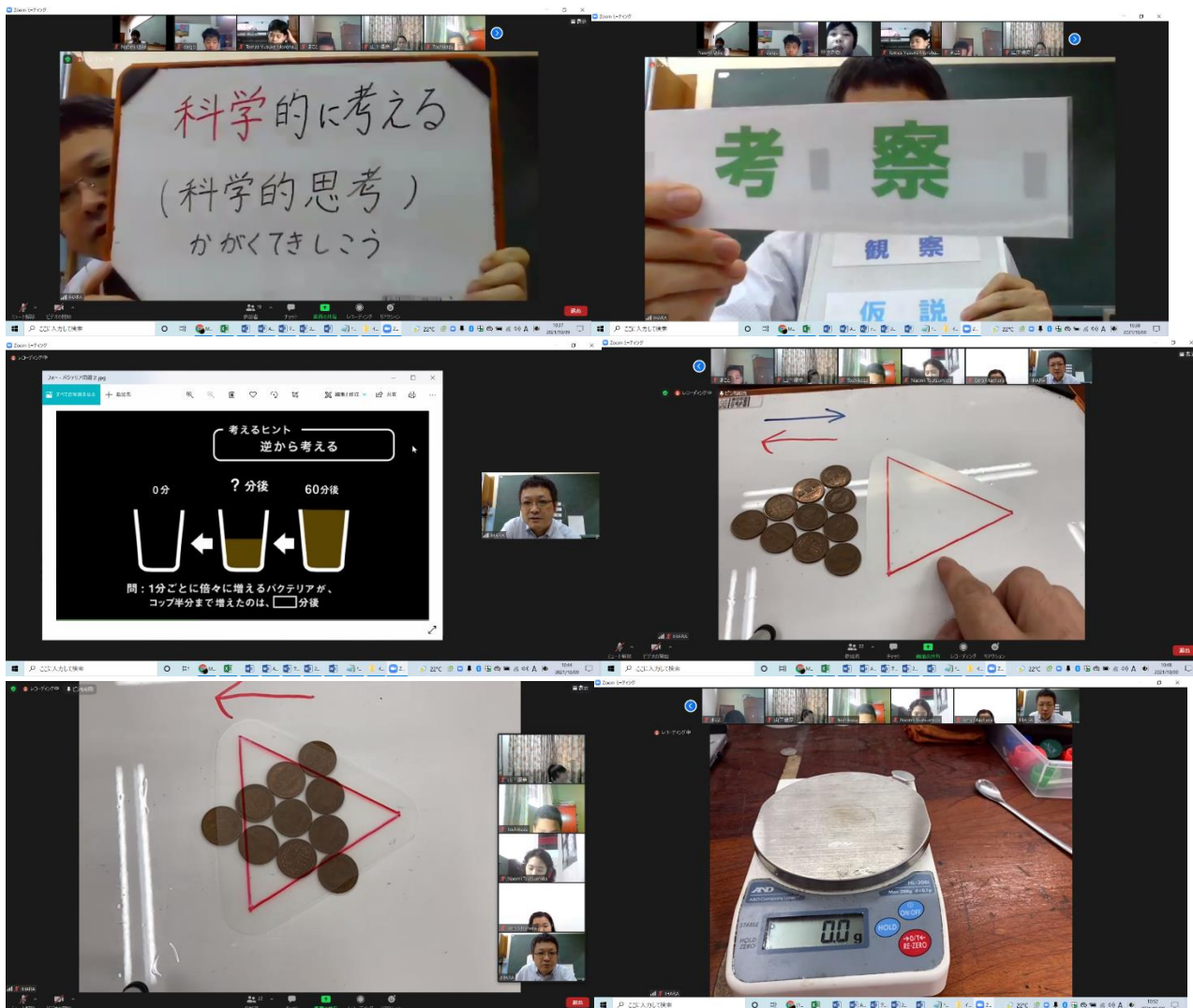
(イ) 出前授業の様子

出前授業の様子は以下の通りである。

・中2 理科の授業 「単元名 科学の考え方を学ぼう」

・担当教員は今年でパラグアイ赴任4年目の伊原教諭。幾人かの子どもたちとも顔見知りで、授業は大変スムーズに進行した。ZOOMの画面越しでも、教員が準備した様々な道具（10円玉等）を上手く使い、児童生徒の興味を引き付け、積極的な発言を促していた。

理科という、普段日本語学校では取り扱わない教科を「日本語で」学ぶ授業。パラグアイの公立校では理科の授業が内容的に薄く、実験などをあまりしないため、このような授業には子どもたちも参観者の先生方も大きな興味を持ってくださったように思う。

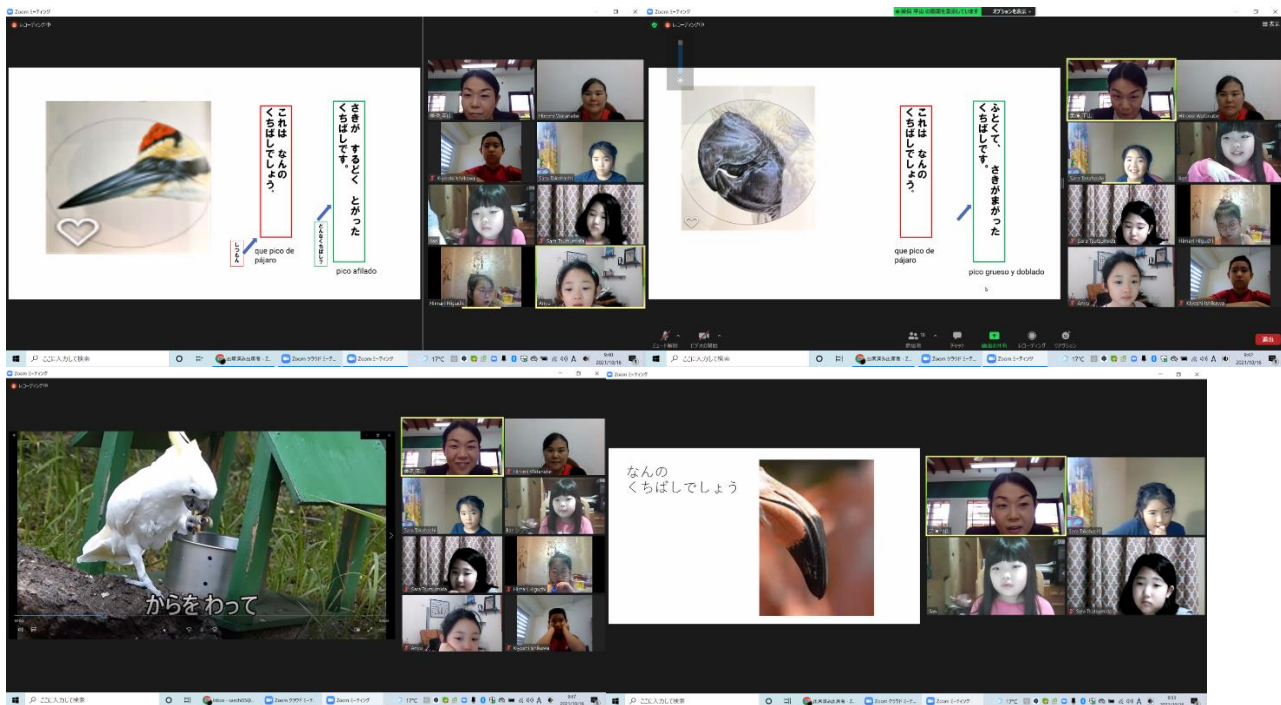


・小2 国語の授業 「単元名 くちばし」

担当は今年赴任1年目の平山教諭。アイスブレイクでは好きな物を各自紹介する時間を設けて、楽しい雰囲気づくりが行われた。低学年かつお喋りが好きな児童が多いクラス。また日本語が得意な生徒、スペイン語が得意な生徒、英語が得意な生徒などクラス内の言語状況が多岐に渡り、かなりコントロールが難しい中、教員が上手く学習へ導いていた。

「くちばし」のプレゼンテーションは日本語・スペイン語で説明が記載されていたが、授業ではスペイン語部分は読まれていなかった。ティームティーチング（以下、TT）でスペイン語部分は日語校の先生に読んでもらうか、またはひらがなだけの記載にして、フォントを大きくしたほうがわかりやすかったかもしれない。グループ分けにブレイクルームなどが効果的に使われていた。





・小4・5・6 音楽の授業 「単元名 ボイスアンサンブル」

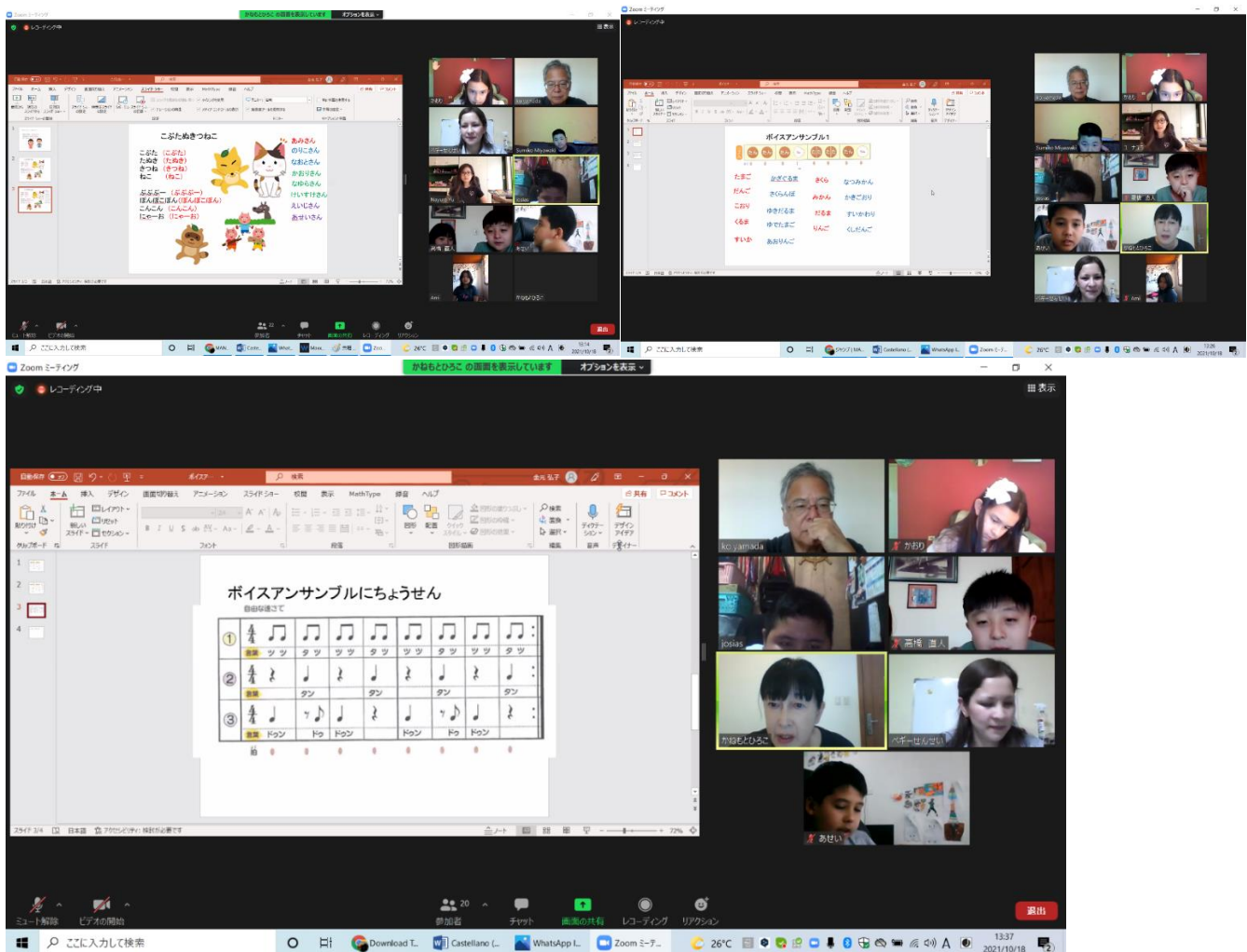
担当は赴任4年目の金元教諭。音楽の授業は毎年大好評である。今年は初めての試みとして、アスンシオンではなくエンカルナシオン日本語学校の児童生徒に対するオンライン出前授業を行った。初めての出前授業、かつオンラインでの実施であったが、授業開始後アイスブレイクなどを上手に取り入れてすぐに打ち解け、授業内容に引き込んでいくことができていた。

「楽器＝声」として声（ボイスアンサンブル）を使って音楽を奏でる授業。言葉には類似の日本語の単語を組み入れ、またそれを児童自身に並び替えさせて意味を理解する工夫が見られた。声を出す場面では恥ずかしがる児童も見られたが、最終的には全員が大きな声を出すことができていた。エンカルナシオン日本語学校から寄せられた感想では、授業の感想として「楽しかった」という声が聞かれた。「たまご」「ボイス」でリズムを取るのがよかったとのこと。「たまごウンゆでたまご」のところは、わからない言葉はあったものの、並び替えていったので意味が分かったとのこと。また授業をしてもらいたいと言っていた。ただけた。

・アイスブレイク、「しあわせなら〇〇しよう」びっくりしよう、など



・ボイスアンサンブル 恥ずかしがる児童もいたが、和太鼓をやっている子どもはこれが大得意で、クラス全体を引っ張って行ってくれた。

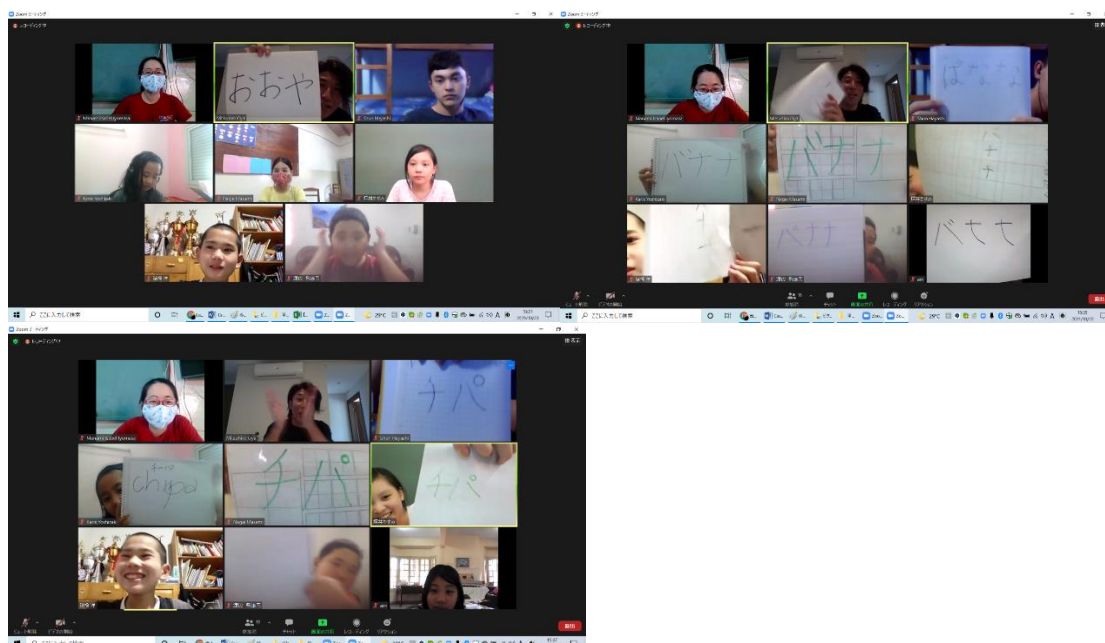


・小5・6（平日） 国語の授業 「単元名 感動を言葉に」

担当は赴任3年目の大家教諭。過去の出前授業でも日語校の児童生徒と交流を持っているため、このクラスの生徒たちとも顔見知り。自己紹介、アイスブレイクともに和やかな雰囲気。

詩を作る授業では、最初に詩のテクニック（擬音語、繰り返し等）を、例を挙げながらわかりやすく説明し、実際にそれらを使った詩を作らせた。生徒たちからは思いがけず素晴らしい詩の数々が生み出され、本人たちも満足そうな表情。事前にかなり具体的に詩の例をいくつも提示し、さらに教師自身の詩を先に提示することで、子どもたち自身にも具体的なアイデアが湧いたように思われる。教師によるポジティブな声掛けも、子どもたちが恥ずかしがらずに発表できるよう促せた要因に思われる。

参観者からの要望で、今回から授業後に短い振り返りの時間を設けることになった。その際にも、参観者から授業についての非常に好意的な感想が多く聞かれた。



感動を言葉に
～心の動きを言葉にして詩に表現しよう～

からはおもて
たくさんあると
つかれるけど
むりしてた
りつばなおうち

まんげつ
さうかいた
センチメンタル
えんとうおし
のんのんの
ほくのかたしかりうた

※黄色い花（雑音語）

かえり道
黄色い花
ぽつんとさいした
黄色い花
夕日をあびて笑う
黄色い花
私も笑った
※黄色い花（雑音語）

見る
春にはさくらがチチチと
夏には雨がツツと
秋にはもじがパパと
冬には雪がフワフワと
おかしな
みんな落ちる影がう
※春夏秋冬（雑音語）
※春夏秋冬（雑音語）

詩に書きたいことを決めよう

- あなたは朝に心を動かされたことがありますか。思い出して詩のテーマを決めよう。
- ※感動したこと、うれしかったこと、好きなことなど自由に考えよう。
- 題材の例
 - 見たこと（景色・ラバーチョコ）
 - 思ったこと（アサド・トルメンタ）
 - くやしかったこと（試合に負けた）
 - うれしかったこと（家族とのこと）
 - がんばっていること（水泳・日本語）

連想（れんそう）しよう

テーマが決まったらマッピングを使って連想してみよう。

マッピング図:

```

graph TD
    A(おいしい) --- B(みんなで食べる)
    A --- C(アサド)
    A --- D(ソバパラグアージャ)
    A --- E(大好き)
    A --- F(コスティア)
    B --- G(ババママ)
    B --- H(家族)
    C --- I(休日)
    D --- I
    E --- I
    F --- I
    
```

散文詩（さんぶんし）を作ろう

- 連想した内容からみじかい文を作ってみよう

わたしの大好きなお休み。家族とアサド。たくさんの人が来てみんなで食べる。ママの作るソバパラグアージャ。パパの焼くコスティア。とってもおいしい。

家族との思い出
大きなお休み
家族とアサド
みんなで食べる
ママの作るソバパラグアージャ
パパの焼くコスティア
とてもおいしい
わたしは
家族とアサド
みんなで食べる
ママの作るソバパラグアージャ
パパの焼くコスティア
とてもおいしい



・中1 地理の授業 「単元名 国の領域・・・国境線、国が成り立つ条件」

担当は赴任1年目の道藤校長先生。事前準備がしっかりされた授業で、次々に現れる興味深い写真や、好奇心を誘われるお話に生徒たちが興味を示していた。

時間をかけた授業準備、深い知識に裏付けされたしっかりとした授業内容、児童生徒の興味を引く授業展開など、日本語学校では普段取り扱わない地理の教科は、児童生徒にとって大きな刺激になっていたように思われる。

半面、授業で取り扱う日本語のレベルが若干難し目だったこと、生徒の中に日本語がかなり得意なグループがあったことから、一部の生徒が授業をリードしているような印象があった。普段の日本語の授業よりはかなり難易度の高い内容だったと推察することから、すべての生徒を取りこぼしなく教えるには、日語校の先生と協力してバイリンガルのTTにするなど、何かしらの工夫が必要かもしれない。授業では、学年担任の弥政先生が、理解ができていない様子の生徒に、スペイン語のチャットでサポートするなどしていた。

国が成り立つ条件

- 領土…土地があれば「領」は「支配する」の意味がある
- 国民…国民がいなければ
- 主権…自分たちの国の政治を自分たちで決める権利。他国から支配されない権利。

国境はどんなところにひかれているか？

いろいろな国境

国境…国と国の境

ルアック川
タイとミャンマー

ガーナとブルキナファソ

メコン川
ミャンマー
タイ
ラオス

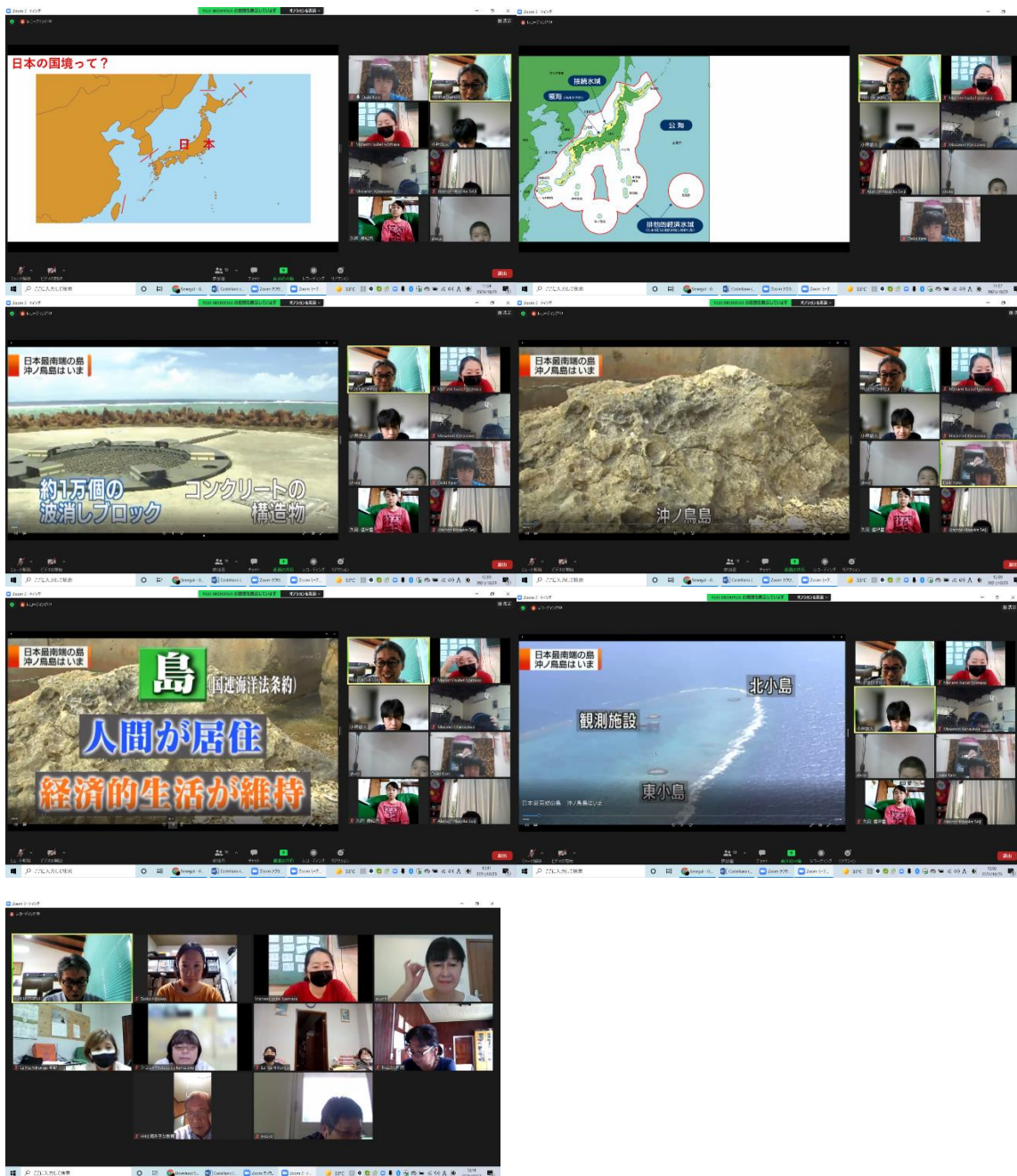
ハラルアイ・エンカルション

アラグアイ
パラグアイ
ブラジル

サウジアラビアとオマーン国境

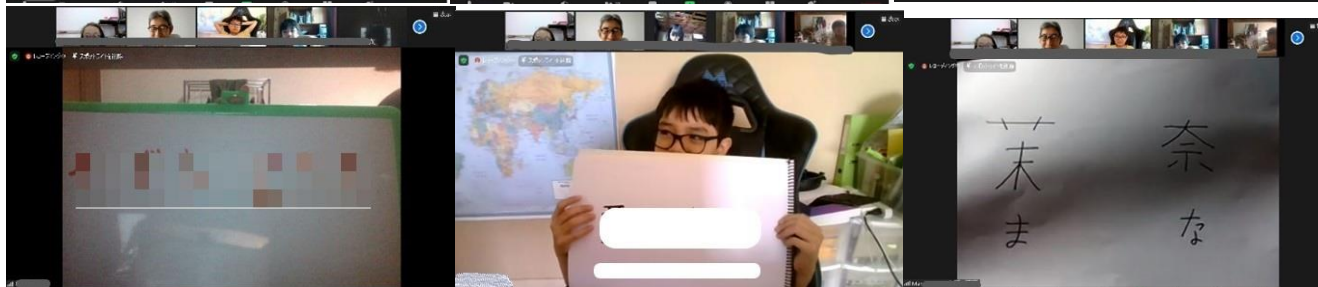
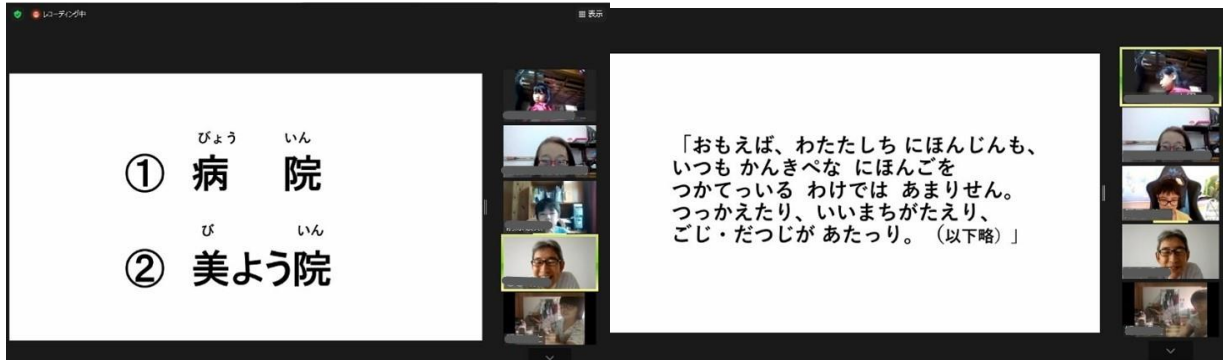
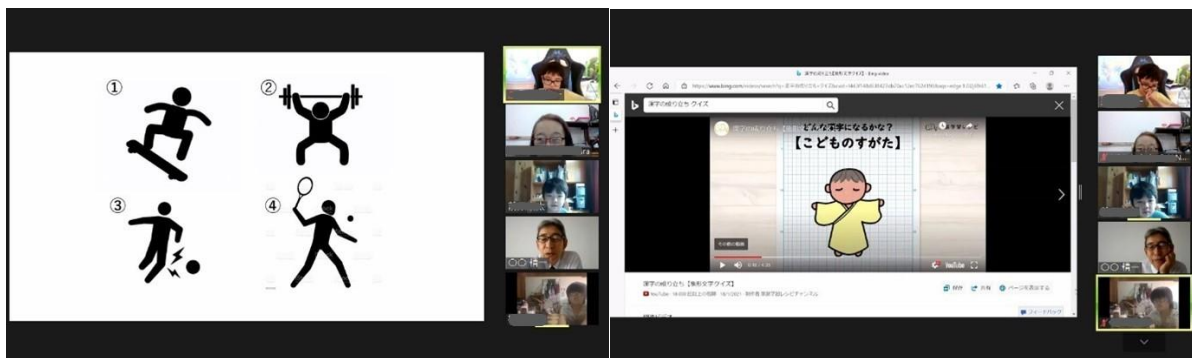
アメリカとメキシコ国境

国境線を見て何か？ 直線が多い！



・小4 国語の授業 「単元名 かん字のがくしゅう」（書写）

担当は今年赴任1年目の宮本教諭。優しい雰囲気児童生徒たちをリラックスさせて上手に授業に導いていた。わざと間違いの多い文章を見せる、類似の言葉を見せるなど、日本語の奥深さが垣間見えるような授業。最後には子どもたち自身の名前を書かせ、皆上手に発表ができていた。



(ウ) 出前授業を振り返って（出前授業に関するアンケート、教材評価アンケート）
アンケートは出前授業を参観された各日本語学校に対して実施。

詳細は添付資料②フォルダを参照のこと。

・出前授業に関するアンケートでは、すべての参観者からオンラインによる出前授業は「参考になった」という声が聞かれた。

・教材評価については、「移住すごろく」、「移住かるた」、副読本『わたしたちのパラグアイ 第3版』、『わたしたちのパラグアイ 第3版 活用事例集』を使用したことがあるか、またその使いやすさについて伺ったところ、おおむね好評をいただいているようだった。特に、副読本については、活用事例集と合わせてご活用いただいております、日本語で現地パラグアイのことが学べるという現地理解教育にもつながっていることが確認できた。しかし、教材によっては内容が難しい（すごろくのクイズなど）という指摘もあり、易しい日本語で、わかりやすい教材を作らなくてはならないという日本語教育の原点を感じる意見も見られた。さらに、パンデミックのため、実際の授業ではまだ使用したことのない学校も多くあった。来年度以降、全面的に対面授業になると言われているため、今後の活用に期待したい。

・日本語学校での授業がオンライン形式であることから、財団のご担当者の方々が、「移住すごろく」と「移住かるた」をオンライン授業でも使えるようなツールをご作成くださったが、実際の使用に至らなかった。配布したのは、アスンシオン、エンカルナシオン、アマンバイ、ピラポ、ラパスの日語校である。その理由として、「使い方がわからなかった」、「今年は授業を取り戻すことが精一杯で、移住学習ができなかった」、「10月から対面授業になり、どの学年も時間数が全く足りなかったため、使えなかった」等が挙げられた。対面授業が全面的に再開するであろう、来年度以降に、教材を活用してもらえることを期待する。

(エ) 今後の課題等

毎年好評の日本人学校教員による出前授業。今年度もいくつかの授業では、最後に生徒たちから「もっと先生と勉強したい」「楽しかった」といった声が聞かれた。

その反面、今年度は昨年度に比べて参観者の人数が大幅に減少した。昨年度は 6 回の授業

に対して、平均 33 名程度の参観者、今年度は平均して 10 名程度の参観者があった。

その理由としては、昨年度はロックダウン中だったために各地の日本語学校が休校になっており、土曜日などの同時時間帯に授業を持っている日本語教師がいなかったこと、および出前授業参観が日本語教師研修を兼ねていたことから、かなりの人数の参観者をお迎えしたのだが、今年は日本語学校がオンラインなどにより再開したため、同時刻に授業を持っている先生が多くいたことが挙げられる。

しかし、参観者の人数に関わらず、出前授業という試み自体を評価する声は依然として高い。参加者からは今後も継続して欲しいという声が聞かれている。AG5 の事業としては今年度が最終となるものの、今後も持続可能な形で同出前授業を継続していけると、本校と現地日系社会のとの繋がりが、より確かなものになっていくものと思われる。その際には参加者人数を安定して確保すること、現地のニーズに合った授業を行うことが求められるが、そのために事前に日語校（または他校）とのしっかりした事前確認が必要になると考える。

また、出前授業は Zoom の機能により録画してあるため、今後希望する学校には動画を配布するなどしてもよいと思われる。

2. 日本人学校における移住学習

また、本年度は日本人学校の児童生徒に対する「移住学習」を行った。

これまで、本事業の取り組みでは、どちらかという日本語学校に在籍する日系人の児童生徒や、彼らを教える日本語学校の先生方への教師研修などが主だった。この移住学習は、日本人学校の児童生徒が本事業に関わる大きな機会となった。

学習開始前の 8 月には移住学習のガイダンスを実施。森茂先生、見世先生、拝野先生といった日本の先生方より、事前にオンライン打ち合わせ会でご教示いただいた内容を基にしながら、児童生徒に移住学習の流れを説明した。学習の中では、これまで本校にて作成した副読本『わたしたちのパラグアイ』、「パラグアイ移住すごろく」「パラグアイ移住かるた」を利用するよう促した。これらの成果物を使用して学習することによって、児童生徒にどのような変化が見られるか検証するため、学習前と学習後にそれぞれアンケートを実施した。

学習方法として、「パラグアイにおける日本人移住」をテーマに、1、2 年生を除くすべての児童生徒が、グループ別または個人で、日系移住地についての調べ学習を行った。それが「生きた学習」になるよう、移住地などにお住まいの日系人の方々へのインタビューを必ず含めるようにし

た。アマンバイ、エステ、チャベスについては、パラグアイ日本人会連合会から、インタビューの申し込みをしてくださった。

(ア) 学年ごとの取り組み

小学3年生～中学3年生までの児童生徒たちが、下記のように各移住地について調べ学習を行い、その後オンラインにてインタビューを行った。調べてわかったことや、インタビューで質問した内容をもとに、調べてみての感想をまとめ、オンライン学習発表会にて発表を行った。インタビュー実施日はそれぞれ10月半ば、発表会は10月22日に実施。

児童生徒の学年	調べた移住地	インタビューした方の氏名	所属
中学3年	チャベス移住地	善村 エミリオ さん	チャベス日本人会副会長
中学2年	アマンバイ移住地	原本 功 さん	アマンバイ日本人会会長
中学2年	ピラポ移住地	工藤 悦子 先生	ピラポ日本語学校 前校長
小学校5、6年生	イグアス移住地	白沢 泉 校長先生	イグアス日本語学校校長
小学校3年生	ラ・コルメナ移住地	関 淳子 先生	関尚子校長先生の御母堂

(イ) 学習発表会の様子

・小学3年生：調べたのはラ・コルメナ移住地。野菜や果物作りの盛んなラ・コルメナ移住地の基本データをしっかり調べ、その後関淳子先生とインタビュー。関淳子先生は、アスンシオン日語校の関尚子先生のご母堂。1936年8月17日にラ・コルメナ移住地に最初に入植された11家族81名の一員で、移住当時1歳半だった方。当時のご自分の体験や、両親から伝え聞いた話などを披露してくださった。

補足情報：関淳子先生は、自宅にインターネットの設備がないため、コルメナの日本文化協会の石川さんが車で送迎し、文化協会内でインタビューを受けられるようにしてくださった。コルメナ日語校の金澤校長先生がPCをセットアップしてくださった。前日に大雨が降った影響で、インタビューの最中に、コルメナで停電が起こってインターネットが切れてしまい、インタビューが中断するトラブルがあった。そのため、途中から電話に切り替えて、児童たちが最後まで関淳子先生に質問をすることができた。

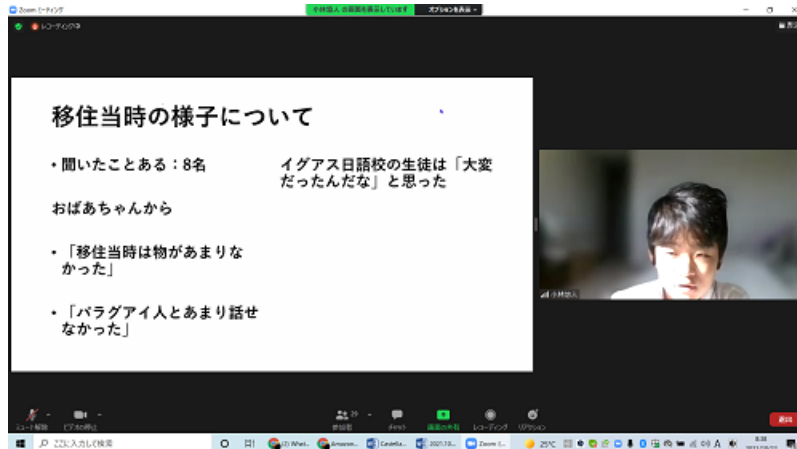


※関淳子先生とのインタビューの様子



・小学5、6年生：調べたのはイグアス移住地。インタビューは、自分たちと同年齢くらいの日系人の子どもたちが、昔の移住についてどう考えているのかを知りたいという思いから、イグアス日語校の生徒さんたちに対してオンラインにて実施。「移住してきた様子、苦勞の話を聞いたことがあるか」、「日本語を勉強するのはなぜか」、「家庭内では何語で話しているか」、「日系人でよかったこと、困ったことはあるか」などの質問が聞かれた。イグアス日語校の生徒さんたちからも、「日本

のどこの出身か」、「どんなアニメを観ているか」といった質問が寄せられ、オンライン交流のような楽しい雰囲気になった。



※イグアス日本語学校とのインタビューの様子

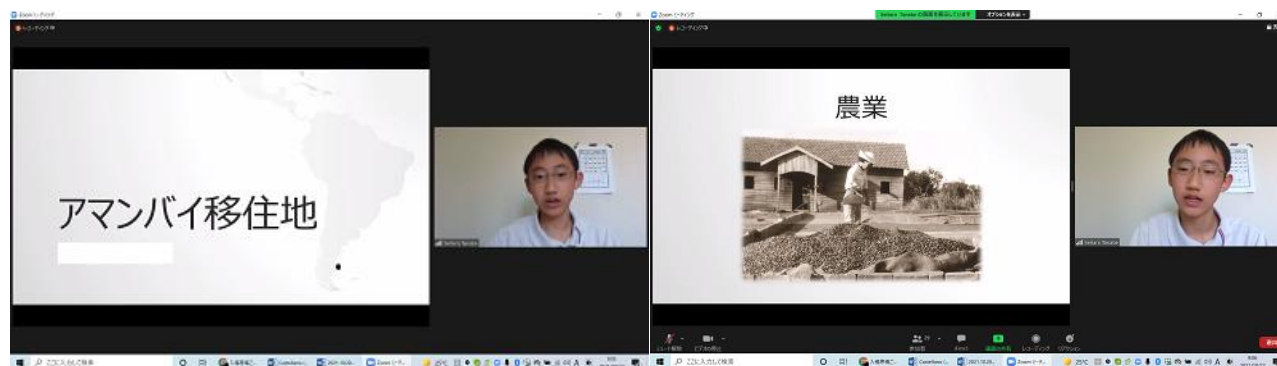


・中学1年：調べたのはシウダー・デル・エステ市の日系社会について。インタビューさせていただきかたの方とは日程が合わず、メールでの質問に答えていただくという形になった。（エステ日本人会の総会とちょうど重なったため、その次の週であれば可能との返答。不測の事態に合わせて、イ

インタビューにはもう少し余裕をもった日程を設定するべきかもしれない。) エステ市については、移住地ではなく都市部であることから、移住の歴史などについてはあまり情報がなく、調べ学習に苦労していた印象。エステ日本人会の下さん、後藤さんがメールでの質問に対して丁寧にご返信くださった。



・中学2年：調べたのはアマンバイ移住地。コーヒー農園で働くための雇用契約に基づいた、契約雇用農移住者が移り住んだ。文字の少ないプレゼンテーションでその分話している内容が入ってきやすく、大変わかりやすいまとめ方。はっきりした話し方で、内容も充実していた。



※原本功さんとのインタビューの様子



・中学２年：調べたのはピラポ移住地。生徒が以前訪れたことのあるピラポ移住地を調べた。インタビューでは工藤悦子先生の移住の体験や、日本とパラグアイの農家の違いなどについて丁寧に教えていただきました。1963年、第21次移民でパラグアイにご家族でいらっしゃった。移住当時、日本では1ヘクタールを持っていたら大地主。パラグアイに移住すれば、30ヘクタールももらえるということで、家族での移住を決意された。現在では、ピラポ移住地では平均して、150～300ヘクタールほどもって農業をしている日系人が多い。今、ピラポで大地主というと、100丁、1000丁も持っている方もいるそう。移住当時、ブラジル、パラグアイ、その他の国等、移住先を選ぶことができた。ブラジルに行くには、ある程度の資金を持っていないといけない。ボリビア、ドミニカに移住するには、土地代もまったくいないという話で、逆に信用できなかった。アルゼンチンでは、花農家のところでの雇用移住。パラグアイ移住は、土地代等はまるっきり無料というわけでもなく、ある程度の条件があり、その折り合いがよかった。3月に移住したため、日本に通っていた学校の卒業証書はもらえないところだったが、当時の先生方が事情に配慮して、先に卒業証書をもらうことができたそう。横浜から船に乗り、パラグアイに行く7家族、ブラジルまたはアルゼンチンに行く10家族と同船で、パラグアイには50日かかって到着した、といった逸話をたくさん伺うことができた。今のピラポの暮らしを、気に入られているそう。移住当時は大変だったが、今は時間に追われずにゆっくりと過ごせるパラグアイが好きだそう。

補足情報：工藤悦子先生はピラポ日本語学校の前校長先生。子どもに説明するのに慣れている方で、戦後の移住についても大変詳しい。本校での移住学習の取り組みに共感して、大変快くご協力いただけた。工藤先生の娘さんの1人は、以前、本校で勤務されていて（現在は日本にお住まい）、その当時は日本人学校の校長先生や生徒たちもピラポ移住地をよく訪れていたそう。



・中学3年：調べたのはチャベス移住地。国際移住地という単語に、興味を持って調べ学習を行った。パラグアイ唯一の世界遺産、トリニダー遺跡のそば。チャベス日本語学校は休校中。チャベスは国際色豊かな移住地で、日本人だけではなく、ドイツ、ベルギー、ウクライナ、また他の土地より来たパラグアイ人等、様々な外国人が移住したのが特徴。北海道、和歌山、宮城、茨木、山口、山形県などからの移住者が多くいる。インタビューでは日本からチャベス移住地までの移住の道のりのことや、オエナウの移民祭りについてなど、色々な逸話をお伺いすることができた。



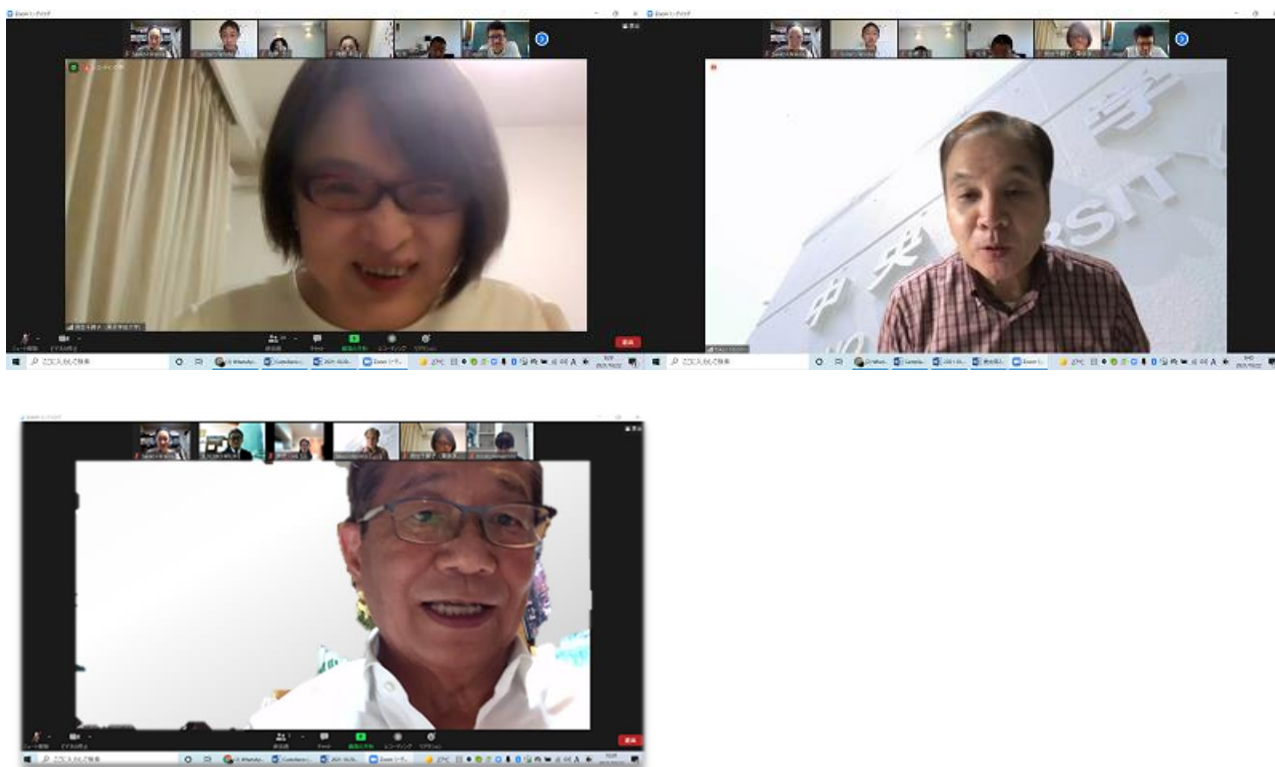
※善村エミリオさんとのインタビューの様子



※見世先生、森茂先生による講評

本校にて移住学習を実施することが決まってから、内容や進め方、評価方法などについて、森茂先生、見世先生、拝野先生、中村相談役より、多くの的確なアドバイスをいただくことができた。各学年のインタビューについても、先生方が分担して、どこかのインタビューをご参観くださり、インタビュー終了後には、それぞれご意見や、ご感想をくださっていたため、学習の進め方には非常に安心感があった。

学習発表会での講評では、それぞれの学年の児童生徒一人一人に対してコメントを寄せてくださり、子どもたちにとって大きな励みになった。



(ウ) 移住学習を振り返って（学習前、学習後の児童生徒のアンケート、移住学習全体の感想）

移住学習を進めるにあたって、学習を始める前と、終わった後に、それぞれ本校児童生徒に対してアンケートを実施した。詳細は、添付ファイル③フォルダの、「事前アンケート

ト（児童生徒 11 名）.pdf」および「事後アンケート（児童生徒 11 名）.pdf」を参照のこと。

移住学習全体の振り返りについては、「移住学習発表会振り返り（12 名）.pdf」を参照。

また、本校教員に対するアンケートも実施した。詳細は、添付ファイル④フォルダを参照。

(エ) 今後の課題等

パラグアイにおける現地学習をする上では、日本人の移住の歴史や、日系移住地についての学習は外すことのできないものである。本校でも、パンデミック前には、移動教室で移住地を訪問する際に、積極的に移住地についての学びを進めていた。

今回の移住学習では、移住地を訪問することなく、資料を用いた調べ学習から始めた。しかし、移住についての日本語資料はあまり数がなく、内容的にも子供向けではないため、児童生徒が自身で調べていくことに難しさがあった。

パラグアイ移住の資料で、子供向けになっているものは、本校制作の『わたしたちのパラグアイ 第3版』の移住についての記述が、唯一のものと思われる。また、2018 年度に作成した「パラグアイ移住すごろく」付属のクイズカードにも、多くの情報がクイズ形式で記載しているため、今回それらを印刷して児童生徒に配布するなどした。また、「パラグアイ移住かるた」や移住記念誌といった資料などで、各移住地の基本的な情報は学ぶことができた。

そこから移住の歴史に一步踏み込んで学習するために、各学年でインタビュー取材を必ず含めるよう指導した。インタビューで、日系人の方々の実際の体験や、ご両親から伝え聞いたことなどをお伺いすることで、移住についての当時の様子がイメージできるようになっていた。移住者自身の生の声というのは、何よりも説得力があり、子どもたちに大きな刺激になっていた。

インタビューでは、現地の日系人の方々に大変快くご協力いただくことができた。本校児童生徒が、移住について知ろうとしてくれることが、嬉しいという声も聞かれた。

課題として挙げられるのは、今後、どのように移住学習を継続して、また深めていけるかということであろう。今回、新型コロナウイルスのパンデミックのため、実際の移住地訪問を含めた移住学習などは、実施することができなかった。インタビューにおいても、数少ない資料

に頼った調べ学習からのインタビューだったため、質問内容も、移住者の方々の個人的なライフストーリーなどまでには及ばず、どちらかという一般的な内容に寄ってしまった印象がある。パンデミックが収束した後であれば、移動教室などと絡めて、日系移住地に暮らす方々の生活や、今の移住地に至るまでの歴史について、より深く学ぶことができるようになると思われる。

3. 本年度の成果

昨年度より引き続き世界中で猛威を振るっている新型コロナウイルスの感染拡大ため、パラグアイにおいても、公立学校等の教育機関では年度初め（2020 年 2 月）よりオンラインまたはハイブリッド式による授業が実施され、本来あるべき教育活動は大幅に制限された。本校や日語校でも一年の大半の授業がオンラインのみとなった。このような状況を鑑みて、本年度の事業計画は実行可能な範囲のみでの策定となった。

「本校を拠点とした日本式の教育方法の発信、普及」については、例年の合同研修会（モデル授業）や、書写指導などは本年度も実施不可能となった。出前授業については、オンライン形式での実施となった。今年はアスンシオン日語校だけでなく、エンカルナシオン日語校に対しても、1 回授業を行うことができた。

本校における「移住学習」では各移住地に関する調べ学習を行い、その後オンラインにて日系人の方々へのインタビューを実施した。オンラインにて、学習発表会を行い、日本からも森茂先生、見世先生、拝野先生、中村理事長にご参観いただいた。パラグアイ国内からは JICA パラグアイ事務所の所員の方々が参観してくださった。

本年度の事業を終えて、良かった点と反省点は、以下となる。

・良かった点：

昨年と同様、出前授業がオンライン形態であったため、従来であれば参観できなかったであろう、地方の移住地の日本語学校の先生方が見学してくださった。今後、ポストコロナの出前授業のあり方として、ハイブリッド形式（通常授業＋オンライン）にて実施できれば、授業をビデオ撮影して配布するよりもよいのではないか。

また、日本にいらっしゃる森茂先生、見世先生、拝野先生、中村理事長に、出前授業の様子や、本校の移住学習の様子を、オンラインにより見ていただくことができた。遠く離れた日本とも、インターネット技術を通じて繋がることができ、メール連絡などで頻繁にアドバイスをいただくことができた。

・反省点：

日本人学校教員と日本語学校の先生方が活発に意見を交換する場が少なかった。昨年度、それまでに比べて少なくなったと感じたが、今年はそれよりさらに少なくなった。出前授業の後の振り返りの時間をもってもらいたいという、日本語学校の先生方からの意見により、出前授業の第4回目から短い反省会を設けたが、参加者が少なかったことと、時間が限られていたことなどから、それほど活発な意見交換の場にならなかった。

総括～5年間の活動成果および事業終了後の持続可能な活動～

これまでの5年間で、当事業で行った主な活動を簡単にまとめると、以下のようになる。

- ・ **2017 年**：出前授業@アスンシオン日本語校。その他：見世先生、森茂先生、拝野先生、中村理事長パラグアイ（アスンシオン）ご訪問
- ・ **2018 年**：「パラグアイ移住すごろく」制作、出前授業@アスンシオン日本語校、合同研修会（モデル授業、授業研究会）、書写指導@アスンシオン日本語校。その他：和太鼓注文
- ・ **2019 年**：『副読本 わたしたちのパラグアイ 第3版』制作、出前授業@アスンシオン日本語校、出前授業@ラパス日本語校、出前授業@イグアス日本語校、合同研修会（モデル授業、授業研究会）、書写指導@アスンシオン日本語校。その他：見世先生、森茂先生（アスンシオン、イグアス移住地）ご訪問、日本祭りに日本人学校児童生徒が和太鼓で出演
- ・ **2020 年**：オンライン出前授業（アスンシオン日本語校）、「パラグアイ移住かるた」、『副読本 わたしたちのパラグアイ第3版 活用事例集』制作、出前授業に関するアンケート実施
- ・ **2021 年**：オンライン出前授業（アスンシオン日本語校、エンカルナシオン日本語校）、移住学習@日本人学校、出前授業、本校制作の教材に関するアンケート実施

上記の取り組みを通じて、本校と日系社会とのかかわりは、この5年間で格段に増えたと言える。パラグアイでのAG5の目的となっていた、日系社会での本校のプレゼンスを高める、日本人・日系人の移住の歴史を学べる副読本や他教材の作成をする、その活用方法を示すといった諸項目はすべて達成することができた。日本語学校における本校教員による出前授業、本校における合同研修会といった取り組みも、好評を持って受け入れていただくことができた。本事業を通じて、本校と日系社会との間の支援と交流の絆は、大きく育ったと考える。

今後の課題としては、どのようにして本事業終了後にも、この繋がりを維持していけるかということがある。本校とアスンシオン日語校との結びつきは、大変強固であると言えるが、そのような繋がりが、他の日本語学校との間にもできていくとよい。そのために、今後も授業公開や出前授業を継続し、日本の学校文化を発信し続けていってもらいたい。それが、本校がパラグアイ日系社会の一員となり、現地社会に貢献する道となる。

パンデミックにより、昨年度、今年度と様々な取り組みが中止となったものの、オンラインによる出前授業といった、遠隔地への授業実践の経験を皆が積むことができた。今後も、アスンシオンから遠く離れた移住地の学校に対しても、オンライン形式での出前授業や、児童生徒同士の交流といった可能性を、持続可能な形で模索していけるとよい。